

Title	カルチュラル・スタディーズの理論と実践(2) 序言
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2002, 2001
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77300">https://hdl.handle.net/11094/77300</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 序 言

昨年度刊行した『言語文化共同研究プロジェクト 2000 カルチュラル・スタディーズの理論と実践』に引き続き、今回も CSC (Cultural Studies Circle) メンバーによる本年度の研究成果の一部をまとめた『言語文化研究プロジェクト 2001 カルチュラル・スタディーズの理論と実践 II ——ポストコロニアルとグローバリゼーション ——』を世に問うことができた。連続性を持たせるべきだという意見により「理論と実践」という表現をそのまま残したが、このタイトルにメンバー自身疑問を感じていることは前回の「序言」でも述べたとおりである。われわれはいまだに、「理論と実践」という表現にこだわりつつ、乗り越えようとあがいているのかもしれない。それはともかく、今回はサブタイトルを付けることにより論集の中身がわかりやすくなるよう配慮してみた。

CSC の今年度の活動は、「ポストコロニアル」「グローバリゼーション」という2つのテーマと関わりのある文献を読むことに終始した。そんな中、2001年9月11日にアメリカで起こったいわゆる同時多発テロ事件は、われわれにポストコロニアル状況、つまり、帝国主義の時代から植民地独立後の時代にいたる世界のあり様を多角的に考えることの意義を実感させる機会ともなった。世界の「片田舎」の出来事に目を向けるにせよ、人種の葛藤について考えるにせよ、文明やテクノロジーの意味を探るにしても、我々の認識や制度のあり方を反省するにしても、地域と世界とが織り成す複雑な力関係を意識せずには、いまや何も語れない。今回集まった論文のすべてにこの二つのテーマの影が見え隠れしている。

われわれの思考の旅は、つねにこの二人の乗客を乗せて世界中を駆けめぐりながらも、やがては日本へと、今日の我々を取り巻く状況へと向かっていった。本書の構成は、その旅を再現する形に組み立てられている。